

縁の下と上

山牧田 湧進



まえがき

【ご注意ください】

- この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- この作品は表現の誇張、強調や、省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- 特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

奇しくも、同じ生年月日を持ち、同時期に同じ部屋へと入門した若い二人。一緒に頑張つて上を目指そうと意気込むも、二人の番付の差は広がっていく一方だった。

春元は関取に、吉内は序二段に留まったままで迎えた成人。

春元の成人祝いと称した関取衆だけの飲み会の中で吉内の話題が出ると、関取衆は吉内も祝おうと呼び出した。

しかし、呼び出された吉内は『番付も上がらないのに辞めない奴は男好き』と決め付ける関取衆に輪姦されてしまう。

春元は距離を取って無関係を装ったが、先輩関取の指図により結局は春元も吉内を犯してしまうことになった。

完全に崩壊したかに見えた二人の関係。

しかし、事態は意外な方向へと動き出し、かつて同等だった二人は、全く異なる立ち位置から同じ目標に向かって進む強固な絆を持った親友となっていく。

早い出世、大横綱、部屋持ちの親方と、表舞台をひたすら歩んで行く春元。

その縁の下には、序二段止まりの、しかし、春元には欠かせない唯一無二の相棒、吉内の存在があったのだった。

【目次】

第一章	成人祝いという名の輪姦……………6
第二章	同期の桜に溝が掘られて……………23
第三章	同じ縁から、縁の下と上、へと……………33
第四章	守り守られる関係……………55
第五章	二人のもう一つの転機……………66
第六章	並んでお茶でも……………88

第一章

成人祝いという名の輪姦

「本当に、お疲れ様でした。そして、本当に、……本当に、ありがとうございます
ました」

親方の目には涙が。そして、親方は白髪頭を下げて深々と長い御辞儀をした。

部屋を持つ八重親方が定年により退職となる同日、部屋を去るもう一人の男
がいた。

部屋付きの年寄でもなければ、若者頭でも、世話人でもない。

協会の正規な雇用ではない、親方に直接雇われていたマネージャーだった。

たまたま、親方と同じ生年月日であったこともあり、親方と同じ日にこの部
屋を去ることを決めた。

その八重親方が、涙ながらに労いの言葉を掛けたという人物。その通り名を
『溜吉』（ためきち）と呼ぶ。

春元（八重の本名）、吉内きちない（溜吉の本名）。元々は二人共、同じ部屋に同期で入門した相撲取りだった。

偶然にも、生年月日までもが同じだったこともあり、すぐに打ち解けた二人だった。力士としての出世には大きな隔たりが出来てしまつて、間もなく、その間柄はとても希薄なものへと変わつていつてしまった。

出世の早い春元は、あつと言う間に関取になつてしまい、吉内の方はずっと序二段より上には上がれなかった。

部屋内での春元の人付き合いは関取同士の付き合い、すなわち、先輩力士との付き合いが中心となつてしまつて、付き人でもない、遠く番付の離れてしまった吉内とは、稽古でもすれ違ふことがほとんどで、風呂やちゃんこも時間がずれ、居室も個室と大部屋で分かれてしまつていて、意識的に会おうとしないう限りは、部屋の中でも接点がほとんど無くなつてしまつていた。

春元には複雑な思いがあつた。

せっかく、偶然にも、生まれた日が全く同じ奴と同時期に同じ部屋に入門が

できて、『よし、二人で頑張って上を目指そう！』と意気込んでいたのに、俺ばかりが番付を上げていく。

あいつとの番付が離れるたびに、『なんだよ、もっと頑張ろうぜ』という励ましが、『お前には頑張る気が無いのかよ』という憤りに変わり、同じ言葉のまま、諦めが変わっていった。

吉内はおとなしい性格で、身体も凄く大きいというほどでもなく、どうして相撲界に中卒で入門してきたのか、正直、疑問に思うところがある。

誰だって、何かしらの可能性が見えているからこそ、こんな極端な世界に入門してきているものだろう？

そうとばかり考えてしまっていた春元だったのだが、その本当の事情を春元が知るには、まだ数年の時を経る必要があった。

入門から5年近くが経過して、二人共に二十歳を迎えていたある日、珍しく関取衆が部屋内で集まって酒を酌み交わしていた。

名目は、春元の成人祝いだったのだが、要は、関取衆は飲むネタが欲しいだけだったみたいだ。

常人には致死量に値するほどの量を呑んで、ほろ酔いになった関取は悪ふざけを始める。

「春ちゃんも大人になったんだから、酒も女も、やりたい放題なんだぞ」

「今度、良いところ教えてやろうか、春ちゃん」

「なんなら、今から、いっちゃ繰り出しに行っちゃいますか、ねえ、春ちゃん」

あまり酒に強くなかった春元は、既に自身の適量を超えて少し気持ち悪くなってしまうていた状態で、先輩関取達の下劣な戯言をやや引いた目で受け流していた。

「それよりさあ、ほら、あの、春ちゃんの同期居たる？ 吉内、だったっけ？

あいつ、春ちゃん誕生日一緒なんだろ？ あいつにもちよっと喝入れてやった方が良くないかなあ」

「ああ、あのずっと序ノ口の奴だろ？ やる気あのかね？ あいつ」

春元は思わず口を挟んだ。

「序二段です」

確かに、春元も吉内のことはとつくに諦めていたつもりだった。でも、こうして他の人に吉内のことを悪く言われることには、まだ少し抵抗があった。

まだ、心のどこかで諦めきれないところがあつたんじゃないか、と春元自身がそう思っていた。

それでも、関取衆はそんな些細な間違いの指摘など気にも留めずに、戯言を続けていた。

「おう、それじゃあ、今から吉内呼んでこようぜ。一発、仕込んでやらなきゃな」

「おう、行こう行こう」

「んじゃ、オレは一式用意しておくわ」

三人が一斉に立ち上がって、二人は吉内を呼び出しに、一人は何らかの準備に向かおうとした。

春元は何やら嫌な予感がして、関取衆を呼び止めようとした。

「あ、あの、まさか、『可愛がり』、とかじゃ、無いですよね？」

春元は、関取衆が酔った勢いで吉内に集団リンチをするのではないかと、心配していたのだ。

「なあに、ただの成人祝いだよ。春ちゃんが成人したんだから、あいつも成人だろ？ あいつも呼んでやらなきゃ不公平じゃないか」

そんな、こんな時だけ優しい先輩面で正論吐かれても、と思う春元だったが、そこに何かを言い返せるほどの考えも言葉も、そのときの春元は持ち合わせていなかった。

準備と言っていた関取は、買い物カゴが一回り小さくなった感じの、蓋付きのものを携えて帰ってきた。スリットが細くて、蓋もあるから、中に何が入っ

縁の下と上

Author	山牧田 湧進 (Yamakida Yuushin)
Circle	Gradual Improvement
URL	gi.dodoit.info

個人で楽しんでいた作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です。)